

今月のみことば 2016年4月

「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。
すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。
それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」
(コリント人への手紙第二 8章9節)

日本人が知らない奇跡の友情物語

イラク・イラン戦争の真ただ中の1985年3月17日、イラクのサダム・フセインが「今から48時間後に、イランの上空を飛ぶすべての飛行機を撃ち落とす」と宣言した。各国民が大混乱に陥り、それぞれの国の特別機に乗って脱出する中、265人の日本人が取り残された。「自衛隊機の海外派遣は許されていない」、「安全が保証されなければ救援機は飛ばせない」と、政府も日本航空もそれぞれが自分の立場を主張するばかりであった。



日本人はパニックとなった。万事休す——そう覚悟した時に、何とトルコ政府はトルコ航空の飛行機2機を、日本人脱出のために提供し、自国民は陸路で避難させたのである。タイムリミットの1時間15分前のことであった。

なぜここまでしてトルコが日本を助けてくれたのか、その理由はそれより95年前に起きた海難事故にあった。

明治23年(1890年)9月16日、オスマン・トルコ帝国の軍艦エルトゥールル号が、日本への親善訪問を終えて帰国の途についた後、和歌山沖で激しい暴風雨に巻き込まれ、座礁した上、機関が爆発して581名の乗組員が命を落とす、という悲劇に見舞われたものの、大島村檜野地区60戸の貧しい漁民たちが我が身を捨てて必死に生存者の世話をしたおかげで69名が助かり、翌年、無事祖国に帰還を果たした、という出来事である。エルトゥールル号遭難の事件を知らないトルコ人はいないほどで、トルコが今も親日で有名なのはこの事件が大きく関係している。



今は串本町となったその貧しい漁民が何の見返りも求めずに乏しい食糧もすべて差し出して必死に遭難者を救助したことが、100年を超える両国の絆となっていることに感動を覚えずにはいられない。

私たちもまた、神との親しい関係に入れていただいたのは、神の御子キリストが、その栄光の富を惜しみなく私たちに与えて、自らは貧しくなってくださったおかげである。